

しかしながら、自分自身も30代後半に差し掛かり、体型の変化や持っていた重さのものが持てないなど、時が経つにつれ自分自身の身体の衰えに嫌気がさしてました。そんな時に、以前友人とこのゲームをしていたことを思い出し、少し前から取り組むようになりました。目標は、今の体重からマイナス2キロを目指しています。



【ゲームで自主トレーニング】

令和5年度

「リーダー養成研修会」が開催されました

理事長 長谷川 美智代

3月9日(土)に和歌山県東牟婁郡(ひがしむろぐん)の「太地町地域福祉センター榎」にて、令和5年度「リーダー養成研修会」が開催されました。くじらの町として知られる太地町は、本州の南端、紀伊半島の東側に位置し、黒潮が打ち寄せる熊野灘に面した港町です。開催場所の太地町地域福祉センターからは、その熊野灘が一望でき、自然豊かな風景に心が癒されました。

今回の研修会は、昨年に続いて、現在の育成会にとって肝要である「育成会活動を活性化しよう!」をテーマに基調講演とシンポジウムが行われました。

「なぜ、育成会はあるの?」と題した基調講演では、講師の全国手をつなぐ育成会連合会顧問の久保厚子氏から、先人たちの育成会発足の思いやこれまでの活動について詳しくお話を伺うことができました。現在よりも偏見と差別が激しかった時代に勇気と英知を結集させて育成会の基盤を作り、政策提言や今ある制度を作るための運動を展開され、現在も障がいのある人が、その恩恵を受けて暮らしています。育成会は、皆がこうした我が子を思う同じ思いで活動し、全国に広がった組織ですが、これは、昔も今も変わらない思いであり活動であるはずだと話されました。そして学校で教育を受けられず、日中の活動の場もなく、地域社会では居ないようにされていた時期が長くあり、多くの親はその子どもを不憫に思い、母親は障がいのある子を産んだ自分を責め卑下していました。各個人の悩みや悲しみは、多くの同じ境遇の親の悩みであり悲しみで

あると知り、何とかしたいという「やむにやまれぬ思い」から立ち上がり、国に働きかけたのが、この育成活動の原点だと言われました。久保顧問の熱く語られる言葉を聞きながら、私たちの子どもが、先人の育成会活動の恩恵を受け、さまざまな制度が利用できる今の時代で暮らせることへの感謝の気持ちで一杯になりました。そして、これからの育成会は、人の気持ち(若い人)の変化に合わせた活動を考えていくことが必要で、育成会活動は、わが子の応援団としての活動であり、育成会に所属する意義が会員に理解され、共に活動することが大切だと述べられました。これからこそ、世代を超えての活動が求められます。育成会を立ち上げた3人の母親の思いを引き継いで活動している私たちも、皆で良くなっていく思いが大切です。育成会の人権活動と福祉活動は、社会に役立ち、社会になくってはならない活動です。育成会だからこそできる社会を潤す活動を協力して実現させましようと思われました。

後半は、「育成会を元気にする具体的な活動」をテーマにシンポジウムが開催され、全国手をつなぐ育成会連合会 常務理事の又村あおい氏がコーディネーターを務められました。

最初に、新宮・東牟婁手をつなぐ育成会の福本恵氏と敷地美香氏から、育成会活動に関するアンケート調査を実施した結果、若い世代の親は育成会を知らない、入会していても何をしているかわからないという回答が多かった。また若い世代の親で、特に関心があったのが親子で参加できる活動だったので、本人活動である「みらいの会」に子どもと一緒に参加してもらい、活動を通して親同士がつながり、育成会を知ってもらうきっかけになるようにイベントを計画しているとの発表がありました。

続いて、滋賀県手をつなぐ育成会の崎山美智子氏からは、市町村の合併を機に支部が減少し、その後も役員の担い手不足から消滅する支部が続く中、若い会員が半数以上を占めている草津市の現状と若い世代が関心を持ってくれるように活動を工夫していることや働いている会員が参加しやすいように配慮している点について話されました。また、県の委託事業として行っている啓発キャラバン隊の活動も精力的にされており、今年度は60カ所で開催されたとのことでした。

そして、最後に大阪手をつなぐ育成会の小田多佳子氏からは、育成会の活性化に向けて、学齢期をターゲットに「会員以外も参加できる公開セミナー」を開催し、オンライン参加、アーカイブ視聴、Googleフォームを利用した参加申し込み等の工夫を凝らし、